

國學院大學學術情報リポジトリ

基調講演武道教育の意義と展望：
和文化教育の観点から(平成二十三年
國學院大學人間開発学会第三回大会公開シンポジウ
ム現代武道の人間開発力：
日本の身体文化から何を学ぶべきか)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 哲 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001221

〔基調講演〕

武道教育の意義と展望

—和文化教育の観点から—

兵庫教育大学大学院学校教育研究科教授
和文化教育研究交流協会理事長

中村
哲

皆さんこんにちは、先ほどの演武では、國學院大學の武道関係、弓道を始め、柔道、空手、剣道、杖道の先生方に一同に集まっていたきました。このように、武道の各分野の先生方がひとつの大学におられることは、全国のエデュ学部、あるいはエデュ大学でもほとんどありません。そして、テーマとして「現代武道の人間開発力」という、シンポジウムを開催することは、これはもう國學院大學が全国に誇れる企画だと思います。そういう意味では、今後こういうような企画を、さらに発展させていただければと思います。

私は、今日は演武だけでなく、シンポジウムの問題提起も話すことになっていますので、今から「武道教育の意義と展望」という講演をさせていただきます。資料として、「武道における△こころ▽の鍛錬と武道教育の意義」という、『教育フォーラム』という本に掲載された資料を配っています。基本的にはその内容に基づいて説明させていただきます。



本日の要点としましては、和文化教育の性格、武道としての居合道の意義を話して、次に居合道だけではなくて、ほかの武道にも共通する武道の基本的な考え方、技の構成、これらを踏まえた、教育としての武道の意義と展望という内容について述べさせていただきます。

和文化教育とはなにか

最初に紹介していただきましたように、私は平成十七年度から「和文化教育研究交流協会」という協会を立ち上げました。その「和文化教育研究交流協会」のホームページとして、プリント資料に、WEBページとして閲覧できる形で公開していますので、さらにご関心をもたれる方は、和文化教育ということも含めて、閲覧していただければと思います。

この「和文化教育」という教育領域については私が提唱したのですが、この用語の意味としては新しい教育の取り組みの運動を、込めています。「和文化教育」とはいったいどういう教育なのかということです。一つは日本の文化に基づく教育、それから文化の交流・創造としての教育、心技体の場における教育、調和と平和の「和」を含む教育だと、定義しています。

文化とは、要するに人間が作り出した、価値体系すべてです。だから何も伝統文化だけではなくて、今私たちが、道具を使ったり機械を使ったり、こういうものを含めてすべて文化の顯れだと解せるわけです。そういう我々の生活の中に見られる文化を、きちっと見直そうと言っています。文化の中でも伝統として称される伝統芸能だけではなく、地域文化、現代文化それか

ら生活文化を、我々の生活との関わりとしてとらえます。そして単に存在する文化を理解するよりも、むしろ文化との関わりを作り上げるという、側面を重視した考え方です。

その教育の一つの方法としては、頭で考えて、知識を理解する方法ではなくて、むしろ頭も身体も、すべて身体的に関わる形で教育に関与できる方法であり、これを心技体という方法として重視しています。

さらに、こういう文化が生み出されるためには、やはり平和、それからお互いの文化と文化の調和がなければ、ひとつの文化が優先して、ただ単にすばらしいという、自国文化の礼賛に終わってしまいます。その意味では調和と和を重視しています。

こういう定義で、「和文化教育」の取り組みをしています。実は「和文化教育」を私が提唱したきっかけが、中学校時代の先生との出会いだったのです。

私が中学校時代に育ったところは、神戸市の須磨区という所です。当時神戸市の中でもマンモス校の飛松中学校では、私の学年が一八クラス、その上が二二クラス、その下が一六クラス、一クラス五五名で、生徒数だけでも約三〇〇〇人在籍していました。それだけの大規模校だったのでいろいろな問題もありました。しかし、神戸市の中学校の中で評価される学校でした。その理由は環境が良かったのです。神戸の旧市街地は、山と海に囲まれた狭い風光明媚な地域でして、戦後に地域住民の方々が宮さまの別邸の跡地を譲り受けて、新制中学校を作ったのです。そういう意味では非常に環境が良かったです。だから、運動場に小川が流れていたり、四季の変化というような自然の姿も、校庭の中で見ることができました。国語とか美術の時間

には、それぞれの内容に応じて自然に接することがありました。それから当時は新任の若い先生方がたくさんおられました。

そういう新任の先生の中のおひとりで、岡山大学の教育学部を出られた先生、社会科の先生です。その先生がたまたま講堂で空手みたいなことをやっておられました。我々はその若い先生の魅力を感じていました。「なんかあの先生面白いことやってるぞ」、ということで話題になって、その先生からいわゆる柔術という柔道の古い形を、教えてもらうことになりました。

あとで知ったのですが、その先生が稽古されていたのは、岡山竹内流という、日本の武道の一つの源流とされるものでした。竹内流は、今でも宗家がおられて、岡山を中心に活動を展開しています。竹内久盛が安土桃山時代に開創した、捕手、羽手、棒、十手、腰廻小具足とか、鎖鎌、槍、薙刀といったものを含む総合武術です。その中で先生は羽手といわれる、柔術をやられていました。そういう武道を教えていただくことを通して、自分自身の一つのものの見方、それから人と人とのつながり、そういうことを先生から教えられました。そのことが、いわゆる武道というものに関心を持つきっかけになったわけです。その後、高校時代は剣道をやりましたが、ちょっと腰を悪くしまして、大学時代に居合道をする機会があり、大学時代に行った居合道をずっと続けています。

居合道の技と考え方

こういう武道との関わりの中で、中学校時代に教えられた先生の言葉として、稽古をやる時には常に「残心」だと、「残心

ということを技の構成から終わるまで、きちっと気を付けなさい」と言われてきました。中学校時代に、「残心」といわれても、武道の重要なことだとしか受け止めていなかったのですが、この教えが、その後、居合道を修得する上において、武道をとらえる概念となっていると思います。

こういうきっかけを通して、先ほど申しましたように、大学時代に始めた居合道が、現在まで続いてきています。今日、演武をしましたが、おそらく個々の形ですので、それぞれの形の意味も、それから居合の形の基本的なことも、なかなか理解ができなかったかと思います。居合道というのは、日本刀を用います。真剣ですので、切れます。重さは約一キロぐらいあります。そのような刀を振り回して、形を演じます。居合道は、抜刀して相手の攻撃に対して瞬時に応じて相手を制する武道です。

居合道の開祖としては、一五四〇年代に山形県の新潟市、ここには今でも居合神社があります。ここで生まれた林崎甚助重信が開祖と言われています。そして、その弟子たちが居合を広め、その弟子の一人の片山伯耆守藤原久安という人、これも説がいろいろありますが、この人が伯耆流居合道の流派を始めたとのこと。この片山久安は、時代的にはちょうど江戸のはじめ、宮本武蔵とか、柳生十兵衛とか、彼らと同じ時代に活躍した武道家です。伯耆流に「磯波」という一つの形があります。後陽成天皇の前で演武をして、その技のすばらしさによって官位を与えられ、それから全国に知られるようになったというような話が伝わっています。私の場合には師匠として出会った相原勝雄先生が伯耆流だったのです。居合には江戸時代の藩ごとにいろんな流派がありました。

そういうたくさんの方の流派の中で、伯耆流の考え方の特色として、武に対する考え方があります。武士の「武」というの漢字には、「戈（ほこ）を止（と）める」、武道の意味として争いを止めるという語彙がありますが、伯耆流では「戈（ほこ）が止む」と考えます。「戈を止める」と、「戈が止む」と、どう違う。言葉上そう変わらないとお思になるかも知れませんが、「戈を止める」となれば、相手の攻撃に対して、それなりに武力なり、なんらかの形で制するわけです。けれども「戈が止む」というのは、お互い争いがないように、自然に川が流れていくように争いを避ける。こうした「戈が止む」という考えで、伯耆流では形の特徴を説明しています。

そして、居合は争う敵を倒すことではなくて「不爭ノ利」を重視すると言われています。確かに、敵に対して制するという意味では争わざるを得ませんが、そういうような争いを超えて、できれば「未発の居合」、刀を抜かずに相手との和の関わりを重視する。そういう思想性が、伯耆流の考え方とされています。

伯耆流の開祖は、こういう剣術の形を編み出して、広めていったのですが、その根底にあるのは、相手を倒すことではなく、相手を生かすことです。そして、争いをするのではなく、できれば争いがないように、刀を抜かなくても、お互いの争いが収まるように、剣の修行をすること。こういう考え方が伯耆流の思想性としてあります。

こうした考え方は、居合道の形の構成を見ますと、伯耆流だけではなくて他の流派にも通じます。つまり居合の技は、自ら刀を抜いて相手をやっつけるのではなくて、相手の動きに応じて、相手を制するという動作です。だから居合道の技は、相手

を攻撃するよりも、相手の仕掛けに応じる技です。どういうことかというと、自ら刀を抜いて相手を殺すのではなく、相手の動きに応じて、それに対応して相手を制するという技構成になっています。

そのために、居合道では「機先を制する」、相手の動きを察知することが重要です。そして、その察知する方法として、「先の先」「先」後の先」という察知方法があります。「先の先」は、相手がまだ刀に手をつけてない時に、殺気を感じて相手の動きを制する。それから「先」は、相手が刀に手をかけて、まさしくこちらに攻めてこようとする時、「後の先」とは、もう相手が刀抜いてこちらに攻めてくる、そういう状況の対応です。

このように相手の動きを察知して、相手の仕掛けに対して、事前に技や状況に応じて制するわけです。一番いい方法は刀を抜かずに相手の殺気を押さえることですが、形としては相手を制する一つの方法が、「切付け」の方法です。これは居合道の基本的な最初の技と考えていただければと思います。相手の攻めに応じて、相手を制するために、一刀目は相手の顔を真上から切り付けます。それから二刀目は、斜めに切り付けます。肩の斜めから切り付けます。それから三刀目は、横から水平に切り付けます。四刀目は、脇下から斜め上方へ切り上げます。

本日の私の演武の中にも、基本的な技の一刀目として、この「切付け」のどれかが使われています。もちろん技にはバリエーションがありますから、何も基本技だけではなくて、いろんな形があります。しかし居合における基本的な「一刀目の技法は「切付け」という手法です。その手法としては、頭、斜めから、水平、それから下から切り挙げる、こういうような方法です。

実は、「切付け」の方法は片手で切ります。片手で頭を切っても、相手は死にません。まだ生かしているわけです。相手の攻めをそういう形で押さえて、それで一刀目で相手が引き下がれば別にそれ以上は攻めません。ところが、なお一刀目で切っても、制してもなおかつ攻めてくる時には、あなたの命を頂戴しますとして、止めを刺します。それを切り下ろし、相手を頭から切り倒してしまう、技になります。

居合道の構成は、「切付け」に始まり、「切り下ろし」、「打ち込み」で終わる。こういう技構成が基本的な構成であることを理解していただければと思います。最初は「切付け」で、最後はとどめの技。そしてその始めと終わりの止めのと間に、いろんな状況設定をしています。座っている時、歩いている時、寝ている時。それから前から攻めてきた時、左右、後ろから攻めてきた時。そういう状況設定を通して、この「切付け」の基本技を使って相手を制しながら、なおかつ攻めてきたら、最後に命をいただくことになります。切り倒して、相手が倒れますけど、本当に相手はこれでもう起きてこないと、そこまでずっと警戒をするという意味で、あとの動きが続きます。

基本的な技の構成というのは、こういう形で構成されていると理解できると思います。こういうような技構成が、四方八方いついかなる状況から攻められてきても、それに応じるような技構成になっています。流派によつて違いますが、前から、右、斜め、左斜め、横、後ろ。そういうように四方八方からの敵に對しての動きで、技がいろいろ構成されています。こういう形で理解していただければ、多少この居合道の仕組みなり、考え方なりを理解できると思います。

そして、こうした基本的な構成を、技として習得するために、一番何が重要なのかと申しますと、居合道の基本技術は、上下振りです。これは自然体で体を開いて、木剣なり刀を自分の中心線に添って振り上げて振り下ろすという、こういう上下振りの操作です。自然体の姿勢をきちんと保ちます。それから上げながら息を吸う、下ろす時に息を吐く。そういうような動きと呼吸を合わせます。こういう動きでまず自分の中心ラインをきちんと保つことができるようにしていきます。

これはいろんな武道全てそうです。中心ラインというのを外したら体が崩れてくるわけです。そして、その中心ラインに添って、「切付け」なり、それから「切り下ろし」という最初の基本技を行います。「切付け」は先ほどの四種類、それから「切り下ろし」は上から真つ二つに切り落とします。そういうような動きのの基本技をきちつと練習すれば、あとはこの基本技に応用編でいろんな技構成が出てきます。だから居合構成の七割くらいは、こういう基本的な動きの習得で学習できます。もちろん、すべての技がこういう基本的な構成になっているのかというと、またいろんなバリエーション、応用編がありますので、基本的な技を習得しておけば、またいろんな形で応用の能力が身に付きます。

という具合に形で居合道の一つの基本的な技の学習をします。私はこういう考え方が居合道を学習する方法であると考えられています。そして、先ほどいいましたように、呼吸と技の動きを連動させる、これは弓道にしろ、空手にしろ、どんな武道の中でも呼吸が乱れたら技が乱れます。呼吸に合わすと同時に動きが一つになります。

こういうような心と体の動きを呼吸という営みの中で、調整しながら、「心技体」という修練をしていくというのが、ある意味では武道の根本であると、考えています。武道、あるいは居合道の考え方や基本的な方法の根底は、呼吸と連動させながら「心技体」という動きを自分の中で身に付けます。これが居合道の技の基本的なことであると言えます。

教育としての武道の意義

それでは、こうしたことを踏まえて、武道をどのように教育の中に取り入れるか、そのことによって、どのような意義があるのか。後半の内容につきましては、杖道の話を例にあげて説明したいと思います。

今日は植原先生と阿部先生で、杖道を演武していただきました。中学校の武道必修科に伴って、柔道、剣道、相撲、空手、薙刀などが学校教育に取り入れられますが、主なものは柔道、剣道です。そういうような武道の中で、広島県東広島市では、杖道を武道として取り上げられています。私自身は和文化教育研究交流協会との関わりで、研究会ですとか大会も開催しています。東広島とのつながりが強くなったので、特に今回は東広島市の杖道の取り組みを例にして紹介します。

ところで、今日の演武会は全て形を見せるというものでした。剣道にしろ柔道にしろ、やはり形というような部分がちゃんとあるわけですが、一般的に武道の中には、競技的な性格が強いものと、演武的な性格が強いものがあります。こう分けますと、剣道にしろ、柔道にしろ、空手にしろ、やはり勝ち負け、

最終的には勝負ということが、競技の中で重視されます。大学の場合でも剣道大会だとか、柔道大会だとか、色んな形がありますけれどもやはり勝つということが優先されるという面があります。そういう意味では武道の中でも、これらは競技的な性格が強いものと言えます。一方で居合道とか杖道というのは、どちらかといったら、演武的な性格です。形を演ずることによって修練していくという、性格をしています。

具体的に言えば、皆さんにもどこかで居合道をやっていたければ、ありがたいんです、中学校で武道をする場合でも、居合道をやっているというのは私自身聞いたことがない。高校では、剣道と、制定居合道を取り入れているところもあります。ただ居合道と通じるという意味で、杖道も非常に興味ある武道の一つとして言えます。

そして、先ほど申しましたように、東広島では杖道を取り上げています。なぜ杖道を取り入れるのかと言いますと、要は柔道にしろ剣道にしろ、防具や設備が必要になります。ところが杖道というのは、棒と木刀があれば割と簡単にとこでもできます。それから形ですので、お互いが組んで投げ合ったり、いろんな形でやる必要があります。だから男女、あるいは男同士、女同士といういろんなバリエーションで行えます。それから形をすることによって、相手の動きを見ることが習得されます。

問題は剣道、柔道に比べて、杖道は指導者が少ないことです。だからどの地域でもできるわけにはいきません。ただ、今日の形を見ていただければ、大体剣道にしろ柔道にしろ、武道をやっている形、形の動きは居合道にも通じるところがあります。所作としては非常に入りやすいと思います。

東広島の場合には、指導者がたまたま地域にたくさんおられたので、指導的関与が非常に、やりやすかったということ、また、先程の杖道のメリットがありますので、武道教育の中で杖道を取り入れることになりました。

その杖道の指導において、まず何が重要なのかと申しますと、基本動作の習得です。これはどの武道でも共通です。それから武道だけではなく色々な文化的な活動、例えば絵を描くにしても、歌を歌うにしても、楽器を弾くにしても、基本動作がやはり重要になります。

杖道における基本動作としては、正座座礼、立礼姿勢、今日の動きの中でも見れました。それと杖の構えと基本打ちです。「本手打ち」、「逆手打ち」は今日の先生方の演武の中でも、敵に対して接する時に、逆手で相手の攻めにたいして対応する動きです。居合道でいう「切付け」の基本動作と言えます。そして打ち立ちの構えとしては、これは剣道も居合道も一緒です。木剣で「中段、左上段、八相、脇」です。このような一つの構えを稽古することを通して、形の基本的動きを最初は習得します。

先ほど言いました、居合道の「切付け」と「打ち下ろし」の基本技が、杖道の基本打ちと通じると思います。そして、これらの基本技を踏まえて、今日の演武での形がなされていたわけです。杖道の形は十二本ありまして、今日の演武の中では、かなり複雑な形も演武されていたのですが、中学校では基本的には、一本目から五本目までを授業で取り上げて、それぞれの形を修練するという指導がなされます。一本目の「着杖」、二本目の「水月」です。

【ここで映像による説明】

これは東広島の先生の形ですが、一本目は相手の打ち込みをかわして、本手打ちで小手を制して、下がって逆手を打ちます。そういうような一つの動きです。こういう技を形として習得していくわけです。

だから、形の習得には、基本的技が本当に生かされています。最初に基本的な技を習い、できるだけそういう技が生かされる形を習得していけば、非常にやりやすくなります。

私が居合道を教えられた時は、そんな基本的な技だとか動きとか関係なく、最初から座り技の複雑な技から教えられて、そして中段の技を稽古しました。私らの時代の居合道の教え方は、全く理屈も何もないまま、先生の言われる形を習得するというやり方でした。

それで、私自身が居合道を教えることになりました、たまたま十三年前にインディアナ大学に行く機会あり、ここで機会があれば居合道を教えるという話をしてましたら、向こうの学生が何人か集まってきました。外国の人に教える場合、座り技から教えますと、とてもじゃないけどできません。ずっと正座をすることができない人に対してどうするのかといいましたら、やっぱり立ち技からしか教えられません。立ち技だったら非常に入りやすいし、立ち技の中でも、先ほど行った基本技がきちっと使われている技から入ります。

基本技の下から切り上げる四本目で、相手を制して、その次に何の技もないままに、「打ち下ろし」、「打ち込み」をする。最初の技と最後の技の間にいろんな動きがない単純な動き、基本技だけ形を教えます。そうするとだんだん慣れてきますから、

難しい技もできるようになってきます。これは私自身が、教育法を研究していますので、居合も私が受けてきたような習得では、とても一般的な人たちには難しいし、特に外国の人には難しいと思います。基本技は何なのか。明確にして、本来的に言えば、初級、中級、上級というような構成だけでも、中級から教える。中級の中でもこれとこれを教える。そういうようなカリキュラムをこちらのほうで考えるわけです。そうしたら、外国の人も一応それなりにできます。そういう基本的な動きをきちんと習得することによって、形が一つ、二つ、三つという形で身につけていきます。

そしてこれを身に付けるためには、反復練習です。武道の一つの形の修練というのは、繰り返し繰り返ししていくわけです。頭で考えてからするのではなくて、動きの中で覚えて、習得していきます。繰り返しやっている内に発見があります。自分で気づくことがあります。こういう動きが自然な、こういう動きが決まったな、そういうような自己学習の中で発見していくわけです。

しかし、自己学習ばかりして悪い癖が付いたら、それがパターン化します。どうすればよいか、しっかりと模範演技、師匠の技を見て、そして師匠の動きを再度自分の中で繰り返しします。この繰り返しを通して形の習得がなされるわけです。

東広島の中学校の子どもたちも、杖道の繰り返し技と、五本目くらいまでの形を稽古するわけです。最初はこの生徒たちだって、杖道を知らなかったし、正座しても足はしびれるし大変だなと思っていたわけです。しかし、形を修練していくことを通して、面白味を得られるし、学習が進むわけです。

それはどういうことかといえば、まず姿勢が良くなる、目線が良くなります。武道をやりながらだんだんと、姿勢が良くなるし、目線が落ち着きます。落ち着かない人、心が乱れている人は、静止しても、目線がこちらを見られません。それが、きちんと見られて、目線がきちんと落ち着くようになります。それから挨拶ができる。そういうように生徒が如実に変わってくるわけなんです。

そして杖道しながら相手を傷つけるといけないから、相手の動きや技、間合いを見ざるを得ません。それで笑い話ですけど、本当の話なんですけれど、東広島市の向陽中学校で杖道を始めた五年ぐらい前です。テニス部の学生が言ったのですが、杖道やり出してからボールが見え出した、ボールの動体的な動きが武道の動きとつながります。結局、その学年はテニスで全国優勝したのです。杖道の効果かはわかりませんが、やはり動きというものが、武道だけじゃなくて、いろんなスポーツの中にも転移して発展させていきます。

という具合に、武道を通して子どもたちの姿勢や礼儀作法、相手の心を考える力、それから学力、忍耐力等を育てることができそうです。さらに集中力、一瞬であっても相手の動きをしっかりとは見ないと、油断したら、ミスしてしまいます。きょうの演武の中でも私だってミスがあります。それは、素人の人が見ても分かりません。しかしミスによって心が乱れたら、次の技がまた乱れてきます。ミスがあろうが、何があろうが、それはそれとして受け止めながら、次の技を動きをしっかりとすることが重要です。

それから子どもたちにとっては、一つの形を習得すれば、達

成感が出ます。学習の一つの到達点として、例えば「着杖」という技を習得したら、次の技へとさらに発展していこうとする、そういう達成感とか意欲がみられます。

このような教育的効果が見られたということが言えます。それから先ほど言ったテニス部の学生のように、他のスポーツの転移にさせていくことで、全国で評価されるような活動にも発展していきます。こういう教育効果は、実は武道だけでなく尺八や琴のような和楽器や書道、絵手紙といった和文化教育と通じます。これらもやはり、姿勢、構えが必要です。

こういうように、武道や日本の色々な文化的な活動をする中で、姿勢だとか、礼儀、相手の心、それから自分の動き、物との関わり方、そういうような事を習得するような体験ができると思います。そして、いわゆる主要五教科のような教科書を通して自主的に学ぶようなことからでは形成できない能力を、こういう文化的な活動との関わりを通して形成できます。それはまさに「心技体」の関わりの中で学習ができるからであって、要するに頭の中で杖道をいくら練習しても、それは駄目です。身体と動きと相手と、そういう関わりの中で、やっていることを通してできるわけです。

そういうことを修練している一瞬ですが、例えば今日の武道の形でも、相手の動きに応じて連動した形の動きをできる時があります。まさしく相手と呼応して、相手の動きと、技術と、心と体とが一瞬一つになる。そういう動きを体得できることが重要です。これは、所作をしながら感じなければ、なかなか説明してもできないし、理解できないと思います。演武を行いながら、演武者は分かります。この技の中でお互い上手にできた

こと、ちょっと上手にできなかったこと。

そして、技をやりながら一瞬自分の存在と動きが一つになる時があります。自分の心と体と技とがひとつになる瞬間があります。その瞬間を味わうこと、感じられるのが、こういう和文化学習の一番の妙だと思います。

さらにその妙が、次の動きを生み出します。一瞬の心と体の一体感が次の動きを生みだし、その一瞬をしっかりと専念することが、ある意味では残心ということだと思います。心と体すべてが一つの中で統一できる時です。

それは皆さんも、素晴らしいものに触れた時は、自分の理解を超えて感動する瞬間があります。美しい夕焼けを見た場合だとか、良い音楽を聴いた場合でも。一瞬自分を忘れて夢中になります。自分の生活的な、利害的な、いろんな利害関心を超えて、自分なりの凄いいものに触れたという、そういう体験があるかと思いますが、そういうことと通じると思います。

これこそが、お金とか、政治的権力とか、地位とか、そんなものでは説明できない、文化的価値の喜びです。こういう文化的な行為の中身には、われわれの心の耕しというか、価値の深まりを踏み出す働きかけがあります。それがまさしく、こういう和文化教育の核です。そういう意味では武道だけではなくて、こういう文化的な活動の意義として、心身の調和的発達としての自己という側面、それから人間的な絆としての武道やつていれば、お互い武道やつてる人間は、柔道であろうが、剣道であろうが、やっぱり武道者というなにか共通的な一体感、価値観の共有があります。これは、地域の祭りであろうが、あるいは同好会でクラブ作ったりとか、なんでもそうです。そういう集

まりは、なんらかの共通価値観に人々が集まっているわけです。そういう人たちが結びつけられることが、文化的な関わりの持つ重要な要素です。

そして、こういう自己、あるいは人間同士の結びつき方がさらに発展していけば、学校、地域作り、国際交流的ないろんな営みという形で、文化的創造が深まってくると思います。そういう意味で今回、國學院の研究大会で、シンポジウムという話だけではなくて、演武会をできたというのは、これは非常に意味があることです。

剣道家は、剣道については知っていても、柔道とか空手なんてほとんど興味が無いし、見る機会もありません。それが日本の武道家の特徴です。例えば、剣道をしていたら、柔道するとか、弓道するとか、居合道するとかいうのは邪道だという人もおられます。しかし、そうではありません。武道に共通するねらい、本質的には共通的なところはすべての武道に共通します。その現れの形式として、方法が違うだけです。そういう価値観の共有を通して、武道の文化、その良さを見直していくこと、それを地域社会、あるいは国際社会に発信していくことは、大きな意味があります。

そういう意味で、今回こういう場が設けられて、私自身も、ここにいるんな先生方のいろんな武道を見ることによって、価値観が共有できたと思います。そういう意味で今回シンポジウムだけじゃなくて、演武会が行われたのは、ここの大学の文化的な独自の試みだと言えます。

最初に居合道の話をしたのですが、片山久安という伯耆流の開祖と、中学校時代にやった竹内流の開祖である竹内久盛は、

実はある学説によれば兄弟、異母兄弟だったといわれています。竹内流の柔術は伯耆流の柔術と非常に似ています。そういう意味では、私自身が何気なく武道に関与した竹内流の開祖と、それからいま自分なりに稽古をしている伯耆流の開祖、そういう人たちが親族的につながりがあったということは、非常に意味があると思います。そういう歴史的な因縁とつながりも再認識しながら、あらためて自分自身の武道の励みとして考えている次第です。

こういう武道の意義を、植原先生とベネット先生を含めてシンポジウムの中で検討できれば良いと思います。私のシンポジウムのテーマを終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

（拍手）

- （１）梶田叡一編『教育フォーラム47（こころ）を育てる』金子書房平成二三年

- （２）<http://30.protok2.com/~wabunka/index.html>